

「在日」とエスニシティ (2)

Koreans in Japan and Their Ethnicity (2)

朴 浩 烈*
Horyol PAK

Abstract : There are some ethnic groups in Japan. Their self-consciousness and identity such as language, blood relationship, culture, and recognition of history are often different from the dominant group in the society.

Koreans belong among the big ethnic groups in Japan.

I will consider their ethnicity as the psychological and social phenomenon, depending on questionnaires and hearing investigations in this report.

Keywords : language, eating habit, recognition of history, nationality, blood relationship, ceremonial occasion, school, name, folk costume

(多摩大学研究紀要「経営情報研究」NO. 19 の続き)

はじめに

多摩大学研究紀要「経営情報研究」NO. 19 の「在日」とエスニシティ (1) では keywords の内、「language、recognition of history、school」を扱い分析を行ったが、本稿 (2) では「eating habit、nationality、blood relationship、ceremonial occasion、name、folk costume」の分析を行う。

4. 「名前、血筋」について

被調査者たちが名前 (民族名 = 本名) を大変重視するのはなぜであろうか。最近の文化人類学では、白人、黒人など、皮膚色による人種区分は、中世から近代におけるヨーロッパを中心とした偏見と社会的風潮 (ステレオタイプ) による差別的区分でありまったく科学的根拠がないということ、そして最新 DNA 研究などによって人種論は否定されている。日本人と在日コリアンは見た目にはまったく変わらないので「自分は日本人である / 在日である」と「自己申告 (カミングアウトもしくは表現)」しなければ見分けはつかない¹。その上であえて民族名を重

* 多摩大学経営情報学部 School of Management and Information Sciences, Tama University

¹ 金両基 (1986) は、差別を回避するため通称を使っている在日コリアン問題を扱いながら、親の配慮 (通称使い) が「差別の温床になっていることに気づかない」と指摘しながら、「その差別の社会的環境を正しく変革させる作業には、自分たち自身の内的な改革がともなわなければならない」と指摘している。

視することは、自分の出自や文化的特徴を大事にしようとする意思の現れであると受け取ることができよう。言い換えれば被調査者たちにとって民族名は、名前によってしっかりした境界を維持しようとする標識 (marker) のようなものでもあり、自己アイデンティティ表出の一形態でもあろう。

また、この名前によるアイデンティティの表出は、任意の民族構成員であるとする人たちにとっては、ある意味において積極的「表出主義」でもある。だからといって政治的な民族の「活性化」や「復活」を意味するものではないということは、在日がおかれた歴史・社会的状況、たとえば「本名宣言」や出自「カミングアウト」などを勘案すれば明白である。どちらかというところ「本名宣言」や出自「カミングアウト」は、自己存在 (尊厳) の表出、あるいはエスニック・リバイバル現象に近いものかもしれない。しかもある種の呪縛からの「自己解放」である可能性も否定できない。

逆説的に考えれば、日本社会における民族名の積極的表出は、上昇志向や安定生活及び精神生活上、マイナス要因にもなりえるといえなくもない²。しかし、そのようなリスクを伴う「名前 (民族名)」を4番目に重視する民族性として選択したというアンケート結果が出たことを、どのように分析できるだろうか。筆者の分析をまとめると以下ようになる。

- A: さきほど分析した「原初主義・近代主義」による愛着の現れ=自己同定
- B: 今まで社会的リスクとは比較的無縁であったという被調査者コミュニティの環境と特徴の表れ
- C: 3世、4世、5世へと代替わりが進む中で、民族性の希薄化に対する危機意識の現われ=アイデンティティの希求
- D: 名前による境界が無視できないという認識 (朝鮮半島や日本、あるいは海外コリアンとの接点にて) の表れ
- E: 「創氏改名」に対するトラウマ³

「名前」は「範疇」問題にも発展する。つまり多方面において「同・異」の視認・黙認を呼び起こす。被調査者の場合、すべての人が民族性またはエスニシティを政治的・経済的利益追求の手段として捉えているわけではないが、実利的・合理的判断によって強調する、もしくは使い分ける場合もあろう。したがって「表出主義」ではあるが、「手段主義」であるか／ないかを判別することは難しく、「手段主義 (instrumentalism)」の両義性を考える必要がある⁴。

² 日本在住15年の人権活動家、ジョエル・アソグバは、「他のアジア系民族に対する差別は、今なお存在している。韓国系の知り合いは、差別を受けることを恐れて、子どもたちに韓国系であることを隠すように言い聞かせている。[日本名]の通名を使っている人たちも多い」と指摘している (朝日新聞09年6月25日付)。ここでの韓国系とは在日であると考えられる。

³ 水野直樹 (2008) は、朝鮮総督府が行った創氏改名は、「同化」という建前と「差異」という差別意識 (= 本音・朝鮮人に対する優越感) に満ち溢れたものであったという実態を明らかにしながら、植民地支配の矛盾 (論理と実態) を鋭く指摘している。このような植民地理論における自己矛盾を克明に明らかにする手法は、駒込武 (2004) にも見て取ることが出来るのであわせて参照されたい。

⁴ 在日社会及び韓国とのビジネスにおいては民族名、日本企業との取引においては日本名 (通称名) を使い分け、経済的利益目的のための手段として名前の機能を持たせるといった意味における両義性。

民族・エスニシティ論では「主観的アプローチ」と「客観的アプローチ」という対概念があるが、「名前」は自己同定であるという主観性と、他者からの認定（他者認識）を促がすという客観性を伴う。そのような観点を総合的に考察しながら、在日コリアンの「名前」を考える必要がある。そこで、実際に在日コリアンの名前とはどのようなものであるのかという視点は欠かせない。民族名といっても多様性を帯びているのが在日コリアンの特徴でもある。

ここでは、在日の民族名を筆者なりに類型別に整理してみることにする。その結果、以下のような傾向が現れる。

A：朝鮮半島（韓国）の族譜主義

主に男性の名前に使われるもので、出身地の親族会・宗親会が決めるトルリムチャ(돌림자)を厳格に守りながら名づける方法である。朝鮮半島では古くから、陰陽五行説の「木火土金水」の部首がつく漢字の中から、親族会などが決めた漢字一字を子どもたちにつける習慣がある⁵。

例：長男－朴秀烈、次男－朴正烈、父方の兄弟の子弟－朴太烈、朴成烈

B：在日（家庭）独自のトルリムチャ（돌림자）利用

これは朝鮮半島との繋がりが無いなどの理由にて、本貫親族会の命名や五行説を採用するのではなく、在日家庭独自にトルリムチャ（돌림자）を作り命名する方法。この場合、女性の命名にも利用される場合もある。

例：（女性）朴純実、朴純和（男性）黄勇一、黄勇二

C：ハンゲル命名

例：高ポラン（보람）、趙アルム（아름）、崔ハンギル（한길）、金チャドル（차돌）、呉オクセ（억세⁶）高セナル（새날）、金セッピョル（새별）、崔サラン（사랑）

D：民族読みでも日本読みでも同じ、もしくは違和感がない命名

例：蔡誠志・蔡賢志（현지・성지/セイジ・ケンジ）、李美奈（mina）、羅世実（カタカナ読みで「セシル」）

⁵ ストラウス（2001）は「アメリカ合衆国へ移民してきたユダヤ人の第1世代の名前は、歴史的含意が豊かでよく知れ渡っている古めかしいものだった。例えば、アイザック（イサク）、ベンジャミン（ベンヤミン）、エイブラハム（アブラハム）…といった名前である。しかしその子どもの子どもとなると、そのような聖書中の手本となる人物にちなんで名づけられるということはまずない」としながら「どんな名前もいわば容器であって、その中に注ぎ込まれるのは、名づける人の意識的、あるいは無自覚的は評価である」と述べている。在日1世の中には、自分の子どもに歴史的人物（安重根など）と同じ名前をつけた人も存在するし、民族的意識（自覚）を尊ぶようにと、封建時代からの因習（トルリムチャ）による名づけが多かったと考えられるが、3世や4世、5世や6世がそれらを古めかしいものとして扱うかは、さまざまな移民（ユダヤ、その他）との比較において今後、興味深いものとなる。

⁶ 「力強い」という意味の朝鮮語「억세다」（オクセダ）からの名づけ。

㉔: 朝鮮半島(故郷)や日本という風土、生まれた月などを生かした命名

例: 長野県で9月生まれということで李長九、
慶尚道が本籍であることから金慶柱
双子で生まれたということで、裴双春、裴双彦

㉕: 姓は民族、名は日本式であるが、朝鮮漢字音読みも日本語読みも可能な命名

例: 金鉄夫、昔明博、林京子、金久美子、朴伊佐男

㉖: 姓は日本名で名は民族式であり、読みも日本語と朝鮮語を組み合わせた命名

例: 山下英愛(やました・ヨンエ)

山下英愛(2008)には、朝鮮人の父と日本人の母の間に生まれ小学校まで朝鮮学校に通っていたが、アイデンティティ問題で悩み「やましたヨンエ」と名乗るようになった複雑な経緯、そして日本人と朝鮮人という狭間における葛藤が克明に記述されている。

あくまでも一例をあげたが、各々、画数などを占ったりする場合も多々ある。漢字には日本の音訓読みと朝鮮漢字音読みがあるということが在日における命名の多様性を示している。

在日の場合、名前の読み方はアイデンティティの表出という側面もあるので、表出を受け取る側にも「メッセージ」を与える可能性がある。国籍はともかく在日系(オールドカマー)である崔洋一(映画監督)、李恢成(作家)、遜正義(ソフトバンク)、金哲彦(陸上競技解説者)などは日本のマスコミ(テレビ・ラジオ)にて、朝鮮語読み(チュエ・ヤンイル)ではなく日本語読み(さい・よういち、り・かいせい、そん・まさよし、きん・てつひこ)で紹介されているが、名前の読みが朝鮮語読みなのか日本語読みなのかは、聞き手(受け手)に微妙なニュアンスを与えるものと考えられる。いずれにせよ、外見的な差異がないマイノリティにとってマジョリティの名前との違いが明らかな民族名の選択とその表出は、人々のアイデンティティ選択でもあり、端的な自己表現手段である。そしてその表出は、受け取る側に何らかのニュアンスをも与えうる。

日本社会では毎年、子どもに付けた名前ランキング(ベスト10)が公表されている。例えば2011年度、男の子の場合、①大翔(ひろと)、②蓮(れん)、③悠馬(ゆうま)、女の子の場合、①結衣(ゆい)、②葵(あおい)、③結愛(ゆあ)となっている。韓国でも名前ランキング(ベスト10)が公表されているが、朝鮮日報(韓国の新聞)によると2013年生まれの子どもの名前は男児場合、①민준(ミンジュン)、②서준(ソジュン)、③지원(チウォン)、女児の場合、①서연(ソヨン)、②서윤(ソユン)、③지우(チウ)となっており「女児の名前が男児に比べ、流行に左右されやすい」と分析している。

在日コリアンの子どもの名前に使っている使用頻度の高い文字(ハングル)を調査した資料(ランキング)によると「表2」のような傾向が表れたという(雑誌 새세대(セセデ)、2011年9、10号をもとに筆者作成)⁷。

⁷ このランキングは被調査者コミュニティにおいて1998年と2010年時に青年年齢期(16歳~28歳)の若者2,000人(1998年:男性500人、女性500人/2010年:男性500人、女性500人)のデータを元に雑誌編集部が調査したものである。

ちなみに「誠」と「浩」の漢字は在日の中で人気の漢字であることがうかがえるが、「誠」は1959年～1978年まで日本において男の子に付けた名前の中で最も人気があった名前であり、「浩」は1960年と1961年の人気No.1の名前であったことを付け加えておく（朝日新聞2012年4月14日付、明治安田生命調べ）。

表2：被調査者コミュニティにおいて名前に使用された人気ハングル文字とその漢字

女性				男性					
	漢字	全体比	98年比		漢字	全体比	98年比		
1	미	美、未…	24.0%	同	1	성	成、誠、晟、聖…	16.2%	同
2	화	和、華…	10.6%	4位	2	수	樹、寿、洙、修…	14.4%	同
3	영	英、榮、永…	10.0%	7位	3	태	太、泰…	9.0%	9位
4	향	香、郷…	8.8%	8位	4	영	英、榮、永…	8.4%	3位
5	순	純、順、淳…	8.0%	2位	5	호	浩、鎬、虎、豪…	8.0%	同
6	리	梨、里…	7.8%	初	6	철	哲、鉄、徹…	7.8%	4位
7	혜	恵、慧、慧…	7.6%	10位	7	기	起、基、紀…	6.0%	初
8	나	奈、那…	7.4%	初	8	일	一、日、逸…	5.4%	6位
9	유	由、裕、侑…	7.4%	初	9	현	玄、賢、弦…	4.8%	7位
10	희	姫、希、喜…	7.2%	6位	10	지	志、智、知…	4.2%	初

次に「ジェンダー」視点であるが、男性（言及数122）に比べ女性（言及数90）の方が「名前」にあまりこだわりを持っていないことが「グラフ5」から判明する。女性は表面より裏面、形式より内実を重視しているとも考えられなくもない。

朝鮮半島と在日の被調査者の場合、結婚によって「文、宋、司空」など女性の民族姓氏は変更されない。しかし生まれた子どもの姓氏は、基本的に男親の姓氏を受け継ぐことになるが、そのような風習が男性の「名前」回答数に影響を及ぼしているであろう。数年前、被調査者コミュニティにおいて離婚した若い女性から話を聞いたが、「離婚して私が子どもを育てるので、あえて父親の名字を名乗る必要がないし、いやだから自分の名字を名乗らせることにした」とのことだったので、ついでに筆者が「数年後、もし再婚したとしたら？」と聞いたところ「そのままかな？ 再婚相手の名字になるのかな？」というような返事であった。このように男性と違い女性の場合、在日も朝鮮半島の風習によって、思いもよらない選択を強いられる場合があるという好例であろう。

次に「血筋（アンケートでは (피줄) と表記)」を分析する。

ここでも男女に差があることが伺える。男性言及数122に対し、女性は85（グラフ5）となっ

た。名前問題同様、男性中心主義的な血統主義による束縛を受けやすい在日コリアン女性の状況の反映と見ることもできよう。

朝鮮学校周辺コミュニティにおける在日家庭では、男の子を望む傾向がいまだにあり、男系によって一族の血統が受け継がれることを望むという考え方が残存していると思われる。長男は実家に入り親の面倒を見るのが当然、そして長男とその嫁が中心となり祭祀を執り行うという風習が色濃く残っている。つまり長男の嫁は、嫁ぎ先によってさまざまな束縛を余儀なくされるといえなくもない。そのような影響なのか、娘を嫁がせる在日家庭では、「できれば長男は避けたい」という傾向があったことも事実である。このような古くからの生活習慣・風習などの影響により、男性のほうがいわゆる出自・ルーツに対する「血」を重んじるという結果（グラフ5）に繋がっていると考えられる。被調査者コミュニティでは、在日同士の結婚を希望している人が圧倒多数を占めるが、現実としては、在日の83.61%（2006年統計）が国際結婚である。国際結婚は今後も増加すると考えられるので、結婚の理想と現実の間に相当のギャップが存在することになる。

「血筋」に寄せられた「理由」の数は多くはなかったが、「血筋は純血でなくてもかまわない、しかし完全に（少しでも）朝鮮民族の血筋がなければ民族性は難しい（20代男性教員）」という意見が、選択理由として最も一般的な考え方であると考えられる。聞き取り調査からも同様の意見を聞くことができた。

1990年代以降、被調査者コミュニティでは、危機意識としての「民族性の希薄化」、「世代交代による価値観の多様化」、「脱民族・脱政治」などのことばが頻繁に発信されたが、これらは同化・帰化と国際結婚の増加、そして民族学校と朝鮮語話者の減少問題が、在日コリアン自体の減少問題として捉えられている結果でもあろう。つまりこのまま放置すれば、日本でマイノリティとしての在日コリアンがいなくなるという意識の現われとも考えられる。したがって、そのような文脈の中での「血筋」問題であると分析することもできるのではないだろうか。

半面、「血筋」を強調することは、①純粹主義による血統主義、②単一文化と伝統主義を全面に押し立て、結果として自・他の境界（われわれ意識）を強固にする可能性がある。そして「難問としてのナショナリズム」問題を俎上に載せる⁸。

筆者の見解としては、ナショナリズムとアイデンティティには明確な区分けを設ける必要があるが、混同もしやすい。マジョリティの視点なのかマイノリティの視点なのか、または当然の権利・人権なのか方外な欲求なのかという見方や要求視点によって違いが生じるのがナショナリズムとアイデンティティが孕む難しさであろう。

聞き取り調査などを参考にすると、被調査者コミュニティの場合、どちらかという「ディアスポラ」としての存続とアイデンティティ、そして今後「ハイブリディティ（異種混交）」としての在日、その存続として「血筋」を選択していると考えられなくもない⁹。植民地時代から今日までの在日を取り巻く「同化」という大きなヘゲモニーに対するアンチテーゼとして

⁸ 「難問としてのナショナリズム」に関しては、塩川伸明（2008）が明快・コンパクトにまとめているので参照されたい。

⁹ 「ディアスポラ」、「ハイブリディティ」からの考察はトーマス・H・エリクセン（2006）、徐京植（2003及び2005）を参照されたい。

の「手段主義」、つまりコリアン系の「血」が薄くなろうが、在日コリアンとして存続しているという選択としての「血筋」をコミュニティ存続の道具として捉えているとも解釈できる。

5. 「食生活、国籍」について

一般成人男性（50代）の回答に、「最も持続可能な民族性が食生活」という「理由」が書かれてあったが、理想と現実を客観的に、冷静に見ている様子が伺える。群馬30代既婚女性によると、「食生活は特別な労力はいらぬし日常生活にてほとんど意識せず身につく文化であるため、現実的にはこれが一番受け継ぎやすい」という意見を聞くことができた。東京40代既婚女性は「食事によるアイデンティティは、他人（社会も含む）の目や、変に肩肘張る必要がないし、日本という環境は在日が民族性を維持するのに難しいけど、政治問題とは直接関係がないので大切だと思う、家庭でできることだけど私自身は特別意識していない…でも子どもたちは朝鮮の食べ物が好きみたいですよ」と述べた。このような意見に集約されるように、「食生活」に関しては断然女性の回答数が多かったが、全体的には4.17%であったため重要度においては決して高いとはいえない。

普段から民族的な食べ物を食しながらも、民族性やアイデンティティ問題として置き換えるとなると重要度（必要度）は低いとなる。このことは、被調査者たちが食生活を政治・社会的に捉えているのではなく、非政治的なもの（日常的）として捉えていると分析できる。

しかし「食」を、民族的（エスニック）な文化や自分たちのルーツ意識高揚における手段として捉えらるれば、事情は変わってくる。特にマイノリティが、自己尊厳や自己存続（同化主義）に危機意識を感じれば、「食」は大切な「境界」となりえる場合もある。

マイノリティにとって、ひとつの文化や特徴が社会政治性を帯びるのか帯びないのかは、決して固定的ではなく、居住地域における状況やマジョリティ社会との関係によって、つまり普遍的自由や平等の度合いによって様変わりする可能性があるだろう。

次に「国籍」であるが、一般的に現代社会において「国籍」は、本人確認とアイデンティティ表出において最も重視されているもののひとつである。現代社会は現実として、国家を単位として政治・行政が行われているため、「国籍」が人々の生活全般に与える影響には多大なものがある（パスポート取得と出入国、選挙権と被選挙権など）。このような傾向が益々増幅しているにもかかわらず、アンケート調査結果は、「国籍」回答が3.46%でしかなかった。つまりそれほど重視していないということになる。

なぜそのような傾向がアンケートにはっきりと現れたのだろうか。まずは被調査者の国籍がどうなっているのか、そこから見えてくるものは何か、という視点に立って考察してみたい。

被調査者の「国籍」はほとんどが「朝鮮」、「韓国」、「日本」の中のひとつであろう。その中でも「日本」国籍者取得者は相対的に少ないと考えられる。在日の国籍別統計は出ていない。あるのは「韓国・朝鮮」国籍者数のみである。ある研究者によると外国人として登録している在日の約80%が「韓国」、約20%が「朝鮮」籍であるという。また金石範（2001）は「在日朝鮮人は六七万人、そのうち“ニューカマー”を含めて韓国籍が五十余万人、朝鮮籍が十四万弱」と述べているが、日本と北朝鮮との政治的緊張関係と、いわゆる韓流ブームによって、1990年代以降「朝鮮籍」から「韓国籍」へと変更した人が急増したのは確かである。たとえば2006年12月15日現在、東京朝鮮中高級学校の高級部3年生の総数228人中、「国籍」表示

としての「朝鮮」141人(約62%)、「韓国」82人(約36%)、「日本」5人(約2%)であったが、同教員によると「朝鮮」から「韓国」への変更が増加しているという。その後の資料(朝日新聞朝刊2010年3月3日付「私の視点」)によると、「全国に10校ある朝鮮学校(高校)には、朝鮮国籍の子は46%で韓国籍の子ども51%います。中国籍を持つ朝鮮族の子どもたちと、父母のどちらかが日本人という日本国籍の子を合わせ3%」と紹介された。

本来オールドカマーといわれる在日コリアンの「国籍」は、旧植民地時代から終戦、そしてサンフランシスコ講和条約、および日韓条約によって翻弄されてきた歴史がある。また朝鮮半島の南北分断と冷戦構造によって、本人の意思とはかけ離れた選択を強いられてきたという側面があるということも否定できない。そのひとつの例が「朝鮮籍」問題であろう。たとえば2009年4月6日の記者会見において橋下徹大阪府知事(当時の肩書)が、「大阪にも多くの北朝鮮籍の人が住んでいる。言論の自由が保障されている日本に住む北朝鮮籍の人は、北朝鮮の今の体制について厳しく批判しないといけない。国民に変える気概がなければ、国は変わらない」と述べたことが報道された。この発言は、知事個人の政治的見解を披露しただけのこととして片付けられるものでもあろう(他国に対する内政干渉でもあるという批判も一部ある)。しかし、ここにこそまさに、国籍に関する重大な問題が内包されているのだ。その問題とは橋下知事が指摘する①「北朝鮮」籍は存在するのか、②「朝鮮籍」は「国籍」として認定されているのか、③「朝鮮籍」(表記)の在日は北朝鮮の「国民」なのか、ということである。

まず、「北朝鮮籍」はこの世に存在しないということ、いわゆる「朝鮮」表記は、日本において正式な国籍ではなく、地域を表す「符号」であること、そして「朝鮮」表記の在日のすべてを、北朝鮮の国民と同一視してはならないということを抑える必要があるだろう。金石範(2001)は「朝鮮総連系の同胞が理念的に共和国公民だとしても、日本と北朝鮮との国交がない限り法的には無国籍である」と指摘している。

「符号」表示としての「朝鮮」あるいは「朝鮮人」という呼称は、植民地時代から使われてきたものであるし、内地との区別としての外地の「朝鮮」・「朝鮮人」であったが、敗戦後日本政府は、在日から「外地人」としての諸権利を一方的に廃止し、すべての在日を「朝鮮籍」としたのである(サンフランシスコ講和条約)。1950年の民事局通達554号「外国人登録事務取扱に関する件」にて、「韓国籍」は認めるが「朝鮮民主主義人民共和国とすることを申請することがあっても、申請に応じない」となった。このときはまだ韓国との国交正常化以前である。その後、韓国との国交正常化の過程において、「韓国」を朝鮮半島における唯一の正式・合法的な国家として扱うことによって「韓国籍」取得者以外の在日、つまり「国籍」表示としての「朝鮮籍」者を一方的に北朝鮮と恣意的に結びつけ、今日に至っているのである。ここに「朝鮮」という国籍表示が植民地時代からの連続性であること、「朝鮮」表記が示す法的地位の曖昧性と、所属国家の不明瞭性としての在日、つまりポストコロニアルな存在としての在日像の実像と虚像が浮かび上がる。

特別永住者の外国人登録証には「国籍」欄に本籍も記入されている。この本籍とは出身地であるが、ほとんどの在日は今日の韓国出身者であるため、今日の韓国における出身道、郡、面まで記入されている。このことから「朝鮮籍」を「北朝鮮」と解釈する日本政府の見解に従うとなれば、「朝鮮籍」の在日における外国人登録証には韓国と北朝鮮が同時記載されているという矛盾を抱えることになる。ここに「朝鮮」の場合、「国籍」表示と「本籍」のアンバランスが生じている。また違う角度から、たとえば帰化した在日、もしくは在日と結婚した日本人

妻が国籍としての「朝鮮」表記を求めても日本政府は、「外国」とは日本が承認している国であるので朝鮮民主主義人民共和国の国籍があとえあったとしても法的には存在しない（日本国籍法 11 条および 13 条 1 項）ので、仮に「朝鮮」国籍を取得できたとしても日本国籍は離脱できないとなる。このような複雑な状況を踏まえ、聴き取り調査過程において得られた、「国籍」に関する見解（9 人）を紹介する。

- A：「私の故郷（本籍）は済州道だ、私は生まれたときから朝鮮籍であったが、自分が国籍を選択した覚えはないというよりも自分にふさわしい国籍はいまだ存在していないと考えている。日本と朝鮮（北）の間に国交がないため、「朝鮮籍」者は、日本の法的解釈からすれば、無国籍者となる」（茨城県 60 代男性、）
- B：「現に日本のパスポートには北朝鮮を除く、と書かれている。また北朝鮮が発行するパスポートを日本政府は正式なパスポートとして認めていないし機能もしていない」（東京都 40 代男性）
- C：「私の国籍は「朝鮮」となっているが、共和国（北朝鮮）の国民であるという意識はまったくくない。自分の表記としての「国籍・朝鮮」は「植民地朝鮮」と思っている」（群馬県 30 代女性）
- D：「自分としては日本が韓国だけでなく、旧植民地の一部であった北朝鮮との間に国交が生じ、南北両国家を法的に認め、過去の清算が一段落したときこそ、私は生まれて初めて国籍を選択できる状況になると考えている」（40 代男性教員）
- E：「本籍が慶尚南道であり、本貫親族会の手帳も持っているし、韓国の役所からコピーした植民地時代の住民登録に、私の曾祖父、祖父、親父などの記載があるので何時でも韓国籍に変えることが出来る。しかし私の国籍「朝鮮」は曾祖父から受け継がれているので、これを変えることは、その人たちが歩んで来た道、朝鮮と日本で生活した痕跡を抹消するようで気が引ける。朝鮮半島の統一、あるいは南北政府による在日問題の一括総括を望むし、そのとき考える」（群馬県 40 代男性）
- F：「植民地政策の結果であるので、日本政府が「朝鮮籍」者を「韓国籍」者と区別することなく平等・対等に扱うべき。北に対する制裁もいはいけれど、それが在日の「朝鮮籍」に対する差別・弾圧になっている、再入国問題などでね。北の問題と「朝鮮籍」問題は別物として考えて欲しい」（東京都 50 代男性）。
- G：「私は韓国籍だけど韓国人だという認識は薄いし、私の家族（実家含む）の国籍は韓国、朝鮮、日本でばらばら。やはり在日じゃないですか？」（宮城県 30 代既婚女性）
- H：「朝鮮籍から韓国籍に変えた。外国や韓国行くのに便利だし、今更国籍にこだわる必要もない」（埼玉県 40 代男性）
- I：「北も南も韓国籍と朝鮮籍の在日に対する統一的法的地位を議論してほしい。たとえば「在日コリア」あるいは「コリア」にするとか。その結果、日本も旧植民地出身者である特別永住者に対する統一的法的地位を確立して欲しい」（50 代男性教員）

意見の「A、D、I」は、朝鮮半島分断と日本と朝鮮半島との関係正常化がいまだ未解決（1910 年の日韓併合条約が朝鮮半島北部において現在も「有効」なのか「無効」なのか、あるいは康成銀（2005）が指摘するように、1905 年の「乙巳 5 条約」自体が当時の国際法上「無効」で

あるため日韓併合も「無効（不成立）」であるのか、など）であるということを踏まえての提案として注目すべきものがある。在日コリアン・オールドカマーの場合、このような歴史解釈問題と法的地位には相関関係があり、その結果として日本における「国籍」表示が生活全般に多大な影響を及ぼすと考えられるという視点における「注目すべきもの」であろう。

在日のあるジャーナリストから聞くところによると（2007年11月28日取材）、以前は「朝鮮籍」から「韓国籍」への変更が顕著であったが、最近は「朝鮮籍」・「韓国籍」から日本国籍への変更が増えているという。商売上（融資・取引など）の理由が主な理由だという。このような状況の中で、被調査者コミュニティにおいて「国籍」はあまり重視されていないと考えられるし、柔軟に対応していると分析出来よう。たとえば、朝鮮学校周辺コミュニティ出身のサッカー選手たちを例（4人）にとって見よう。安英学（朝鮮籍）は日本のJリーグと韓国Kリーグで活躍しながら北朝鮮代表、鄭大世（韓国籍）はJリーグ、ドイツのブンデスリーガ（その後、韓国Kリーグ）で活躍しながら北朝鮮代表、朴康造（韓国籍）は韓国Kリーグと日本Jリーグで活躍しながら韓国代表、李忠成（日本国籍）はJリーグ（その後、英プレミアリーグ）で活躍しながら日本オリンピック代表になったことを考えれば、国籍とアイデンティティ、そして活躍舞台はバラバラであるということがわかる（4人とも在日オールドカマーの子孫）。このことから、「国籍」にこだわることによって縛られることを回避し自己実現している在日の若い世代の特徴を見て取れる。

現代社会において「国籍」は、出自とアイデンティティの表出手段のひとつである。しかし在日コリアンの場合、これらが複雑な歴史的経緯と北東アジアにおいて構築されてきた状況により、単純化・画一化だけを持って計ることが出来ないといえる。尹健次（2001）が指摘したように、「現実に、在日は、北に朝鮮民主主義人民共和国（共和国）、南に大韓民国（韓国）の国家権力が存在し、また日本という国家支配のなかで差別的な外国人登録を強要され、「朝鮮」ないしは「韓国」という国籍（表示）をもたされるなかで、南北どちらかに従属する仕方では自己の民族性や自立性を確保しにくい状況に置かれた」のは確かである。しかし被調査者たちの中には、従来の枠組みとしての国籍表示に、不満と不自由さを感じている人が少なからず存在することを聞き取り調査から確認できたことになる。時間と距離が短縮されるグローバル化の時代、閉塞感を打破しようとする新たな意思表示が現れていると分析できよう。

在日の中には南北どちらかに帰属意識を持っている人も存在するが、分断状況を考慮し、国家帰属意識を留保している人も存在する。そのことはアンケート調査にも現れている。ポストコロニアル的存在である在日においては、帰属意識と外国人登録上の表記は区別して扱わなければならない場合がありえるという状況を見逃すことができない。

本来、誰がどの国籍を持っていようとも何ら問題はないはずである。仮に差別や偏見が助長されるような国籍問題が存在するならば、人間は生まれながらにして自由かつ平等である、とする基本的人権という立場から改善されなければならない。

6. 「冠婚葬祭・民族衣装」について

「グラフ4」（多摩大学研究紀要 No.19、P62 参照）を見る限り「冠婚葬祭（2.26%）」と「民族衣装（0.45%）」は、最も回答言及数が少なかったばかりか、男女別統計（グラフ5）（多摩大学研究紀要 No.19、P62 参照）においても最下位であった。冠婚葬祭も民族衣装も、どちらかといえばエスニックな表現の一形態であると考えられるし、見た目で見るといえる意味において表出である。この「D群」と他の「A～C群」との違いをあえて求めるとするならば、在日として隠せるものと隠せないもの、見えるものと見えないもの、内面と表面といい表せなくもない。

被調査者をウチ、その他をソトと考え、たとえばことば（朝鮮語）は使わなければわからない、歴史認識は話すか書かなければわからない、学校や国籍・血筋・食生活もあえて言及しなければわからない。しかし民族衣装や冠婚葬祭は隠せない、つまり「丸出し」となる。この「丸出し」を「かたち＝形式」と考えるならば、その他（ことばや歴史認識・学校など）は「内容」と捉えることもできる。つまり被調査者たちは「表現（パフォーマンス）」よりも「理解（内実）」、つまり表面的（物質的）アイデンティティよりも内面的（精神的）アイデンティティを重視していると考察可能ではないだろうか。

現在、在日社会で行われている結婚式、成人式、葬儀、祭祀、トルチャンチ（똥잔치）、還暦などは混成文化になっていることは間違いないであろう。ここでの混成とは朝鮮半島の南北の混成、日本と韓国との混成、植民地期と戦後の混成である。もともと在日（朝鮮半島も含む）社会では二十歳を祝う成人式はなかったが、筆者が調査・聴き取りを行った結果、1963年にはすでに群馬県にて在日の成人式が行われたことが確認できた。このように在日は、もともとなかったが日本という実生活の場に適した行事も創出させてきたことになる。

在日の結婚式や成人式をはじめとする冠婚葬祭の内容と形式も、オリジナリティにあふれたものとして定着していると考えられる。そのオリジナリティの中でも際立つのものとして民族衣装があげられる。

なぜ在日の民族衣装がオリジナルなのか。それは南北とも1945年の解後から1980～1990年代（民族の文化や伝統を再評価しようとした機運が高まった時期）までは、「民族衣装＝時代遅れ、洋装＝近代化」という風潮により、洋装が支配的地位を確立していたという研究があるが、被調査者コミュニティにおいて民族衣装は、冠婚葬祭はもちろんのこと、チマチョゴリが職場のユニホームとして、学校の制服として日常化してきた歴史を刻んできたからオリジナルなのである。

朝鮮学校における中学、高校、大学に通う女学生たちが着用した学校制服としてのチマチョゴリは、チョゴリ（上衣）は白、チマ（下衣）は黒（あるいは紺）であるが、このチマチョゴリ（素材、デザイン、色彩）は21世紀、「美女応援団」として数回、韓国にてスポーツ応援した北朝鮮の若い女性たちが着装したことにより、文化の移動と定着の観点から注目に値する。

韓東賢（2006）によれば、朝鮮学校の女学生たちは1950年代末からチマチョゴリを身に付けていたが、制服として全国的に完全定着したのは1963年～1964年であるという。そしてその制服チマチョゴリの原型は、1920年代の植民地朝鮮における「新女性」たちによる「改良チマチョゴリ」であるということ、封建遺習とたたかいながらもファッション・リーダー的存在であった「新女性」たちによる「改良チマチョゴリ」は、植民地という状況において伝統と

近代の表象であり、ナショナリズムの表出でもあったと分析している¹⁰。ここでの「ナショナリズム」はアントニー・D・スミス (1998) による定義、すなわち「ある人間集団のために、自治、統一、アイデンティティを獲得し維持しようとして、現に『ネイション』を構成しているか、将来構成する可能性のある成員の一部によるイデオロギー運動」として考えるのが妥当であろう。そして「チマチョゴリ制服の基本的な構造や形態、製造工程などは、伝統的な民族衣装としてのチマチョゴリを踏襲している。だが、その素材やデザイン、色使いなどいくつかの点は、現代の朝鮮半島や日本を含む海外コリアン社会などで、晴れ着として着られる民族衣装としてのチマチョゴリとは異なり、洋服の要素が取り入れられている。ようするに、朝鮮学校の女子生徒が着ている制服は、単なるチマチョゴリではなく、民族衣装としてのチマチョゴリが洋装化され学校制服化されたもの」と述べている。朝鮮学校の女学生たちは、帝国の解体によって日本国内へ折り返されたコロニアル状況の中で、奪われた民族性を回復し、自分自身の人間性を取り戻すための手段として、チマチョゴリ制服を自発的に選択したという（「伝統の創造」を伴うもの）。

このように、在日にとってチマチョゴリをはじめとする民族衣装は、単なるエスニックなシンボル（表層）としてだけではなく、歴史と現状が折り重なり構築されたアイデンティティ（裏層）が複雑に絡み合ったものであると分析できよう。

在日が多用してきた民族衣装の中には、男性のパジ・チョゴリ（ズボンと上衣）もある。パジ・チョゴリは子どもの誕生を祝い、すくすく育てたいとの願いがこめられたトルチャンチ（뽕잔치=1歳祝い）などで着せることがあるが、現在も朝鮮学校周辺コミュニティにおいては一般化している。

1950年代まで在日1世の男性の中には普段着としてパジ・チョゴリを、そして外出時にはトゥルマギ（周衣）を、1世の女性たちの中には1960年代までチマチョゴリを着て外出したことが確認されている。朝鮮学校の男性教員の中には現在も、入学式や卒業式などフォーマルな場面においてパジ・チョゴリを着こなしている人もいるが、最近の傾向としては韓国で製造された男性用韓服を着用する人も少なからず存在する¹¹。このように被調査者コミュニティにおいて民族衣装は、他の在日だけではなく、朝鮮半島との比較においても使用頻度が高かったと分析できよう。しかしアンケートの結果は最下位であったが、これをどう分析できるだろうか。たしかに世代交代と価値観の多様化、そして民族性の希薄化は間違いなく進んでいるという影響の反映でもあろう。しかしこれだけをもって片付けられるであろうか。

たとえば学校の教員における「民族衣装」の回答数がゼロであった。女学生がチマチョゴリを制服としてきたし、各種学校行事や学芸会などで民族衣装は欠かせないが、ゼロ回答で

¹⁰ 「新女性」に関する研究は近年盛んに行われているが、一般的に植民地朝鮮における「新女性」とは、近代的な新教育を受け、封建的な慣習を打破し自由と開放による自我意識に目覚めた女性を指すと考えられる。たとえば朴八陽 (1905～1988) の詩「女人～新時代の女人のような、その女人をうたう」(1930年1月「朝鮮之光」)には、聡明で清潔感あふれ、働きながらも本を読み、貴賤(貧富)によって人を区別しない女性(新女性)に対する朴八陽の尊敬のまなざしがうたわれている。

¹¹ 被調査者コミュニティでは民族衣装を奨励する風潮がある。たとえば最近、群馬の朝鮮学校の場合、入学式や卒業式をはじめとする学校行事を知らせる「案内状」には、「学父母・同胞たちも民族衣装を着て参加しませんか」という文が書かれている。

あった。これはチマ・チョゴリ（第1制服）以外に第2制服が制定されている現状と関係があると考えられる。つまり民族衣装（チマ・チョゴリ）にこだわれなくなった致し方ない訳（チマ・チョゴリ切り裂き事件）が影を落としているということ、それにより表出（チマ・チョゴリ制服という伝統）を抑えてでも内実（教育内容）を重視しなければならないという不本意な選択がアンケートに現れているとも考えられる。これも抑圧に抗する形での、被調査者コミュニティにおけるアイデンティティでもあろう¹²。

エドウィン・イームス／ジュディス・G・グード（1996）が指摘するように、「服装や化粧など個人の外見は、最も目につくエスニックの目印」であることは疑いのない事実である。在日コリアンが民族衣装を身にまとうということは、自分がコリア系であるということを積極的に表す行為でもある。

仮説ではあるが、「学校＝民族教育」がなくなり「ことば」が同化（日本語）し、「歴史認識」が昔を語るようにノスタルジー化しても、最も単純なエスニック表出手段としての民族衣装が最後まで残るかもしれない。そうなれば重要度が最も低かった「民族衣装」の生命力が一番あったということになる。このように逆に、歴史を未来から現在へと坂道を下るようにさまざまな仮説を立て吟味しながらアンケート結果を考えると、朝鮮学校周辺コミュニティの現状は、「最も目につくエスニックの目印」に頼るまでには至っていないエスニック・アイデンティティを保有しているとも分析できなくもない。

ただし、エスニックな集団（個人）が「最も目につくエスニック目印」を積極的に好んでいるのか否か、居住社会の目がそれに対し寛容であるかないかは、別次元の問題である。多文化（多言語）共生社会の成熟度がキーポイントとなる。

7. 結語

日本社会においてエスニック調を帯びた属性を有するマイノリティとしては、アイヌ、琉球（沖縄）、アメラジアン、日系ブラジル人、東南アジア系難民、在日外国人（フィリピン系など）などがあげられよう¹³。グローバル化及び人口減少社会の加速化に伴い、否応なしでも多様なエスニック集団との共存は避けられそうもなく、「エスニシティ」を幅広く、そして基本的人権という立場から他者認識論について理解することは喫緊の社会的課題といえよう（排外主義や外国人差別、ヘイトスピーチという観点から）。

本稿ではナショナリズム問題も取り上げたが、ナショナリズム概念を都合よく恣意的に解釈し導入することには警戒しなければならない。つまり権力から排除されている社会的弱者であるマイノリティを扱う場合、マイノリティの自己尊厳的アイデンティティとナショナリズムを混同してはならないという問題提起でもある。

国民統合や政治統合を目差すマジョリティ、権力と社会システム・富を共有、あるいは独占するマジョリティが見る視線と、さまざまな境遇におかれたマイノリティの視線は違うという

¹² 金石範（2001）に「天皇制とチマチョゴリ」と題しての論考があるので参照されたい。

¹³ イ・ヨンスク（2008）は、「マイノリティとは、文字通り社会の中の少数者、すなわち権力を剥奪されている人々のことを意味する」と指摘している。

ことをおさえるべきであろう。そのような視線で見渡せば、「同化と差別と排除」、「都合の良い概念借用」をマイノリティが鋭く指摘するのも当然の権利でもある。

たとえば糟谷啓介(2000)は、「同化主義とは、かならず差異の抹殺と差別の拡大という二重の方向をとる」と指摘しているが、このような状況におかれたマイノリティが自己アイデンティティを確立することと、マジョリティが自己アイデンティティを主張することとは意味が違わざるをえないことは明白である。

イ・ヨンスク(2007)はアイデンティティと絡めて、「「私は〇〇である」となんの困難やためらいももたずに答えることのできる者は、じつは、なんらかの外的権威から特許状を手に入れているにすぎない」と指摘しているが、糟谷が指摘した二重方向に追いやられている者が、イが指摘した権威(権力)からの特許状(特権的アイデンティティ)」を手にするなど出来ないはずであろう。

本稿にて属性や志向性を分析することによって、被調査者たちにおけるアイデンティティ抽出も試みたが、被調査者を含むマイノリティにとってアイデンティティとは、自己尊厳であると同時に「自分はこのように生きたい」という希望でもであろう。民族集団を文化共同体という側面と、政治市民的共同体という側面を映し出すのとして考える視点もある¹⁴。

文化共同体としては先祖、領土、言語、風習、宗教などの文化的共通性の共有、政治市民的共同体としてはすべての構成員に共通的に適用される法的権利、義務、経済システムの共有を指すが、被調査者の場合、文化共同体としても、そして政治市民共同体としても完全なる枠に収まらない。日本と南北朝鮮、そして在日社会という4つの要素が複雑に入り混じっているポストコロニアルな状態が被調査者コミュニティであるが、アンケート調査結果はそのような様相を改めて浮き彫りにしたといえよう¹⁵。国家、民族、社会、コミュニティ、言語、アイデンティティなどを考える場合、「これである」と明確に線引きしたりカテゴリー化したりできない複雑さが横たわっている。

被調査者コミュニティの特徴のひとつとして2世3世4世は、同郷・本貫よりも出身都道府県や同校意識を大事にする傾向がある。例えば同じ北海道出身者、神戸朝鮮高級学校卒業生、大阪朝鮮高級学校ラグビー部出身、朝鮮大学校同窓会などであるが、これは1世が朝鮮半島を基準に捉えた連帯意識ではなく、居住する日本を基準にした在日特有の新たな連帯意識であろう。しかし、このような傾向は被調査者だけでなく、一般の日本人にも当てはまるが、在日の場合、これらが明確なひとつの国家や民族を背景にしたアイデンティティではないがゆえに強

¹⁴ このような議論を整理し、民族とナショナリズムの問題に関する詳細な考察を行っている研究としては、권혁범(2009)、ナショナリズムを広範囲にわたって論じている書籍としては、大澤真幸/姜尚中[編](2009)、エスニック・アイデンティティ及びナショナル・アイデンティティとナショナリズムとの関係性を歴史的に考察した研究としてはアイントニー・D・スミス(1998)があるので参照されたい。

¹⁵ ここでは4つの要素としたが、在日という存在と歩みには米国の存在と東西冷戦も欠かせない。

¹⁶ イ・ヨンスク(2007)は「現在の日本社会にはひきつづき民族差別と同化政策が、かたちを変えて存在している。ただし、それは「戦前」の要素が払拭できないまま残存しているのではない。むしろ、他者を排除し同化しようとする広義の意味での植民地主義が「戦前」と「戦後」の断絶を超えて近代日本の同一性を支えつづけていると考えることができるのではなからうか。たとえば、「在日朝鮮人」の問題ひとつとってみても、そのことが明らかになるはずである」と指摘している。

固にならざるをえない、というところに特徴を見出せる。このような連帯意識も被調査者における自己アイデンティティを形成する一要因になっていると分析できよう。

学術調査の結果を踏まえ、「ことば、食生活、歴史認識、国籍、血筋、冠婚葬祭、学校、名前、民族衣装」をさまざまな角度から分析したが、「ポストコロニアル的アイデンティティ」という物差しを加味すると、被調査者コミュニティにおけるアイデンティティを次のように捉えられよう。「分裂アイデンティティ」と「自己回復型アイデンティティ」の葛藤における「自己尊厳および実存アイデンティティ」。

「分裂アイデンティティ」とは、朝鮮半島分断による引き裂かれたアイデンティティであり、朝鮮半島と日本という空間的距離における不安定アイデンティティであろう。「自己回復型アイデンティティ」とは、コロニアルからの連続性を踏まえながらも、自己ルーツと複合アイデンティティを求めようとするアイデンティティであろう。これらが複雑に絡み合いながらも、マイノリティである「自分」という存在を見失うことなく、しっかり地に足をつけて歩んでいこうとする「自己尊厳および実存アイデンティティ」と分析できるのではないだろうか¹⁶。

本稿では、在日とエスニシティ、つまりエスニック集団が表出する心理的・行動的性格の総体、属性と表象を研究したことになる。今後、人口減少、少子高齢化、国力衰退、地方自治消滅危機、外国人労働者、移民政策などをキーワードとする議論の推移に注目せざるを得ないが、グローバル化が促進される日本社会の未来を見据えると、様々なエスニック集団における認識、存在形態、象徴などを理解するためのエスニシティ研究は益々重要性を帯びるであろう。

参考文献

- (23) 金両基 (1986) 『韓国人か日本人か—今こそ在日同胞文化の創造を』 サイマル出版社
- (24) 水野直樹 (2008) 『創氏改名—日本の朝鮮支配の中で』 岩波新書
- (25) 駒込武 (2004) 『植民地帝国日本の文化統合』 岩波書店
- (26) A・L・ストラウス (2001) 『鏡と仮面—アイデンティティの社会心理学』 片桐雅隆 [監訳] 世界思想社
- (27) 山下英愛 (2008) 『ナショナリズムの狭間から』 明石書店
- (28) トーマス・H・エリクセン (2006) 『エスニシティとナショナリズム』 明石ライブラリー 94 鈴木清史 [訳] 明石書店
- (29) 徐京植 (2003) 『半難民の位置から—戦後責任論争と在日朝鮮人』 影書房
- (30) 徐京植 (2005) 『ディアスポラ紀行』 岩波新書
- (31) 金石範 (2001) 『在日の思想』 講談社文芸文庫
- (32) 康成銀 (2005) 『1905年韓国保護条約と植民地支配責任—歴史学と国際法学との対話』 創史社
- (33) 尹健次 (2001) 『「在日」を考える』 平凡社
- (34) 韓東賢 (2006) 『チマチョゴリ制服の民族誌—その誕生と朝鮮学校の女性たち』 双風 舎
- (35) アントニー・D・スミス (1998) 『ナショナリズムの生命力』 晶文社
- (36) 金石範 (2001) 『在日の思想』 講談社文芸文庫
- (37) イ・ヨンスク (2008) 「マイノリティに開かれた言語的公共性」—一橋大学大学院言語社会研究科/国立国語研究所/韓国国立国語院主催「国際シンポジウム：言語の公共性と言語教育」発表論文
- (38) 糟谷啓介 (2000) 「言語帝国主義の射程」、糟谷啓介/三浦信孝 [編] (2000) 『言語帝国主義とは何か』 所収、藤原書店
- (39) 권혁범 (2009) 『민족주의는 죄악인가』 생각의 나무 (서울)

(40) 大澤真幸／姜尚中 [編] (2009) 『ナショナリズム論・入門』 有斐閣

(41) イ・ヨンスク (2007) 『異邦の記憶—故郷・国家・自由』 昌文社

* 新聞・雑誌資料

朝日新聞 (日本)

朝鮮日報 (韓国)

새세대 (セセデ) 朝鮮青年社発行雑誌 (在日)